

自由民主党 中央政治大学院
まなびとスコラ・オープン講座
憲法に学ぶ「この国のかたち」

第2期「まなびと夜間塾」特別講座

2021年6月1日

講師：ノンフィクション作家 保阪正康 先生
テーマ：「石橋湛山の65日 首相の格は任期にあらず」

ご紹介いただきました、保阪正康と申します。文筆を生業（なりわい）としておりまして、特に日本の近・現代史を実証的に調べるというのをテーマに生業を続けてきました。なぜそういうテーマを追いかけたか。私は、歳を言うのも何ですが、昭和14年生まれです。戦後すぐに昭和21年に小学校1年に入りました。小学校1年に入って、昭和21年、22年、23年、戦後民主主義の教育です。そこで習ったことは、「日本は悪い国でした。東条というのは悪人です」ということです。「アメリカは正義の国でした」という極めて単純な二元論的な歴史です。私は北海道ですが、私だけではなくて、私たちの世代全部がそういった教育を受けたのです。私たちより2～3歳上の世代は、神武天皇から始まって天皇の名前を何人かすぐ言えます。あるいは教育勅語を復唱したりできます。私たちはそういうことが全くできない。そういう事を学校は教えてくれないわけですが、覚えようとする教師に殴られました「そういう時代じゃないのだ」と言って。

結局、歳を経ると、こんなことでいいのだろうか、例えば私たちの国は中国や東南アジアを侵略したという、私は、結果として学問的にそういう見解が成り立つというのを否定は全くしない。「それはそうでしょうと言います」が、しかし二十歳を過ぎた青年が何のために鉄砲を持ってニューギニアまで行って、中国の奥地まで行って戦ったのか。そういう彼らの考え方、それから戦争の仕組みというものをきちんと語って残しておかないと、戦争を体験した次の世代が「日本は侵略したのです」とだけしか言えないとなると、あまりにも無責任ではないか。「侵略した・しない」というのは確かに重要な問題だけど、もっと重要なのは、どうしてああいう戦争を起こしたのか、そこに何の問題があったのか、その当時の人たちは何を考えていたのか、ということを中心にきちんと実証的に調べて残していくことだと、30歳を過ぎて、出版社にいたのですが思い立って、そういうのを残さないといけないという事で、では最初に何をやるかと思い、『東京裁判』を書いて、それで歴史をきちんと整理しようと考えました。東京裁判を書くには4か国語が話せないといけないのですね。個人が出版社を辞めてフリーで物書きになって、お金を使ってアメリカ、イギリス、フランス、ソ連、中国など、そんなことできません。東京裁判を徹底的に調べて書くなどは無理です。

では何ができるか。僕らの世代は、東條英機というのは悪人ですと教えられて育ちましたが、東條英機ってどんな人だったのだ？ と思って、昭和49年から56年まで調べました。それで東條英機の評伝を書いたのですが、その時に私は、軍人の指導者たち、東條の副官、秘書官、東條の奥さん、そういう人たちにもかなり会って、日本の当時の戦時指導者は何を考えていたのか、思想とかそういうことを抜きに実証的に調べる仕事をしました。

結局、その路線を追いかけることが仕事になったのですが、私は思想とかそういうこと以前にやはり客観的にきちんと残しておかなければいけない。残念なことに、この国は資料を全部、燃やしているのです。燃やしているということは逆に言えば、その戦争を起こした世代の人たちが、「俺たちは歴史で何と語られてもいいのだよ」と開き直っているのではないか。私はそこがすごく不満なのです。しかし、とにかく何であの戦争を起こして、どういふことなのだということは、生きている限り、人を求めて証言を聞いていこう、それを残していこう。それはなにも肯定的にということではなしに、客観的に、私たちの国はどのような選択をしてああいうふうになったのかということ調べて、40年ぐらい調べてきました。

もう5分ぐらい自分の話を続けますが、延べにして4,000人ぐらいに会いました。日本だけでなく、日中戦争の時に中国の国民党は何を考えていたのだ、蒋介石の息子や蒋介石の側近の軍人、国民党の要職の陳立夫（ちん りつぷ）という人、あるいは蒋介石の次男の蔣緯国（しょう いこく）とか、孫文の孫の孫治平（そん ちへい）とかそういう国民党の人たちとも会いました。あなたたちは日本軍と戦っているとき何を考えていたのか。ソ連が崩壊した時はロシアへ行ってロシアの資料も見ました。アメリカのワシントンでも資料を見たり、在郷軍人会などで話を聞いてきました。

私たちは戦争を一面的に語ることはできないのだなというのを、結論として私は持っています。しかし同時に、私たちの国が犯した誤りというのは私たち自身の社会の中にある問題だということも感じました。単純な一言で言えば「統帥権の問題」があります。統帥権の問題をきちんと私たちの国はなぜ総括できなかったのでしょうか。それは明治維新を見れば分かります。私たちの国では、明治維新から議会政治よりも軍事が先行したわけです。議会政治が形を作っていたのは明治18年、その後、憲法が22年と進んでいきますが、軍はその前に組織を作り「軍人勅諭」を作り、軍の1つの組織原理を作って動いていました。維新の頃は軍事が先行していた。維新の後には軍事が先行していたと考えることによって、統帥権の独立も考えなくてはいけないのだなと気づきます。

もう1つだけ付け加えさせていただきます。昭和の軍事の誤りは「統帥権の独立」にあります。統帥権の独立が誤りであるということは軍人たちも戦後に言っていますけれど、実は第1次世界大戦が終わった時の日本の軍人たちは、佐官クラスが何人もベルリンへ勉強に行っています。石原莞爾（のちの陸軍中将）も行っていますし東條も行っています。永田鉄山（陸軍中将）も岡村寧次（陸軍大将）も小畑敏四郎（陸軍中将）も、次から次へと行って

います。ベルリンだけではなくスイス、イタリア、フランス、いろいろなところへ行っています。

そこで何を学んで帰ってきたか。石原莞爾、永田鉄山は、統帥権の独立はやはり問題だと、きちんと学んでそういうレポートを書いています。短期決戦勝負なら統帥権の独立はあり得る。軍が主導権を持ってもいい。しかし、長期持久戦になったら統帥権の独立はあり得ない。政治が介入しなければ戦争は進められないのだと、もうすでに言っているのです。では、なぜ永田鉄山や石原莞爾のそういう考え方が昭和の戦争の時に生きなかったのか。そこはまた検証しなければいけない問題だと思います。

なぜ、そういう話をするかという、そういう問題点を、その都度その都度、時代の中で、マスコミにあって説得力をもって書いていた人は、そんなにいないのです。いない中で数少ない人が実は石橋湛山だったということに注目する必要があると思います。思想をもって書くというのではなく、実態を見ながら、その実態の中で、どこが問題かということを見て書く、それが石橋湛山なのです。言論人です。

石橋湛山は、山梨の日蓮宗のお寺の息子です。小さいとき若干の苦労はするのですが、早稲田大学の哲学科に入って、哲学・宗教の勉強をします。それから社会に出て東洋経済新報社に入るのです。石橋湛山は東洋経済に入って、経済原論の原書を読んで自分で勉強します。「東洋経済新報」は日本の経済を実態的にレポートする雑誌ですが、そのレポートする雑誌の中で勉強しながら知識を積み、そして積んだ知識の中で動く経済を見ていく。極めて実用的だということが分かります。プラグマティックな人だということが分かります。

ともすれば理論があって、理論に現実を合わせようとする、どうしてもそれが合わなくて、理論倒れになって混乱したり、現実を見る目と理論とうまく接点が見つからないといって現実の分析不可能になってしまっていて、流れに任せてしまうような人、あるいはそういう状況が多い中で、石橋湛山は現実を見ながら、その現実の中で経済理論というものを試していきます。経済が、実は人間の欲望、あるいは人間社会の生きていくという本能、そこへ哲学的なものを持ち込むのですが、そういった新しい発想を持ちながら経済を見ていくという人です。その視点で、彼は明治の終わりから昭和 20 年まで、東洋経済の社説と申しますか、「時論」というのですが（月刊評論誌「東洋持論」）、それを書き続けます。結果的にそれは、現実に進んでいる日本の軍事指導体制を批判する形の論理になります。

石橋湛山が明治の終わりから昭和 20 年まで言論人として書いた言論は、ほぼ毎月書いていますから、3つの特徴があると言っていいと思います。1つは「小日本主義」。大日本主

義ではない。日本はそんな他国にまで出て行って、植民地を持つ必要はない。身の丈に合った、この4つの国（島）と沖縄を含めてのこれに相応しい国家であるのがいいのだと。大日本主義を選択した瞬間に軍事が動く。そして経済は、ある意味で言えば資源の収奪を行わざるを得ない。それより身の丈に合った小日本主義でいいのではないかということが立脚点の1つです。

2つ目は、「軍事が優先することに対して反対」する。軍事が優先することによって社会の中のいろいろな価値観が変わる、それと軍事が優先することによって政治が結果的に軍事に従属することになって政治の自立性が失われる、ということを何度も説きます。それが2つ目ですね。

3つ目に、彼は恐るべきほど日本社会の共同体の「情念的」なものを嫌がります。否定します。社会が動く、社会が活性化していくのは、ある種の理論とか哲学とか、そういうものが軸になりながら、論拠に基づいて動くのだ。気分で動くのではない。論拠に基づいて。その論拠に基づいて動くのは何かということ。彼は経済をやりましたから、経済が結局はケインズに出会って（ジョン・メイナード・ケインズ／イギリスの経済学者、官僚）、ケインズ理論を自分で勉強し、辞書を引き、読みこなし、そして日常動く経済を報道する会社にいながら、その経済をケインズで見えていくということに徹し切ります。理論で見えていく。だからこそ彼は、論拠がきちんとしていないということに関する見方に対しては、かなり批判的になっている。彼の書くものを見ると、小日本主義でいいのだ、軍事が先行してはいけないのだ、あらゆることは1つの根拠、論理、それがきちんとしていなければいけないのだということを、どのレポートにも書いています。

そしてそのレポートの中で彼は、結果的に、時代が進んで軍事が主導権を持っていく中で、軍事に対して批判せざるを得ない。東洋経済新報は何度も発禁になりそうになりますが、しかし石橋湛山は経営の一角にもいましたから、自分の意見だけで会社が潰れて、権力の犠牲者であるということを嫌う。きちんと権力が許容するところは許容し、論理が許されるところはいい。例えば、天皇という制度について石橋湛山はほとんどレポートを書いていません。では、天皇という制度に反対なのか。そうではないのですね。天皇という制度は日本の歴史から見て当たり前だ。この当たりの制度を軍人が思議している、それが問題なのだというようなこと。だから、天皇という制度を褒めたり、極度に称えたり、軍に利用されるようなことをやってはいけないのだということ。

彼は言論人として生きる中でいつも、当時、憲兵隊などにいつも睨まれていました。しか

し彼は、「本当の愛国者は自分である」と言っています。本当の愛国者は誰でもない自分だ。なぜなら、彼の次男は学徒出陣で征ってケゼリン島（委任統治領・マーシャル諸島）で戦死しています。ケゼリン島で亡くなったと聞けば大体、戦闘よりも、それ以前の餓死とか、そういうことが多いというのは分かりますが、早稲田大学で、短期現役制度「短現」という制度の下に、主計将校で征くんですね。息子が戦争で死んでいる。息子が亡くなった日には、ケゼリン島ですから亡くなった日など本当は分からない。大体何日頃となるのですが、彼は部屋にこもって、ずっと香を焚いて息子の死と向き合っています。

息子を戦死者として国に差し出したことを、息子には悪いけど、という言い方は変ですが、別に恥じていない。私はそのことを、国が要求することに、息子に対する情はあるけれども、しかし、戦死したということに対して悲しんでいるのではない。それを惜しんでいるのではない。私が惜しんでいるのは、親と子の関係で、父と子の関係を、それは父と子の2人の関係だから、毎年、命日には自分の部屋で香を焚いて静かに祈っているのです。自分の中にあるそういうのを、本当の愛国者と言うのだと、彼は何かで、お前は愛国者でないと言われた時に激高したのです。石橋という人はあまり激高しないタイプですが、私こそが本当の愛国者だと言ったというのは、石橋の本当の怒りなのだなということを私は感じます。

石橋湛山という人は、戦前、言論人で生きて、戦後、政治家に変わりました。その変わった理由は幾つも挙げることができますが、1つは、「言論はむなし」。言論だけで世の中は変わらない、言論を政策にしていく。政策にしていくことによって日本を変えなければいけないのだ、というようなことを戦争が終わった時に感じたのです。おりしも第1次吉田内閣で、大蔵大臣に吉田首相から所望されます。石橋湛山は文句なしに喜んで引き受ける。戦後復興が経済的なところから始まるということは自分の信じてやまないところだから喜んで引き受けます。

しかし彼は大蔵大臣の時に GHQ と何度も喧嘩をします。当時 GHQ（General Headquarters）は連合国（最高司令官）総司令部で、マッカーサーが最高責任者（連合国軍最高司令官）ですが、この国の主権者です、占領支配をしているわけですから。GHQ に逆らうということは、その人の、時には生命まで危ない。しかし、石橋湛山は徹底的に逆らっていますね。先ほどの3番目の理由です。論理的に納得できないものには徹底的に逆らう。具体的に言えば、GS（Government Section）。GHQ の中には民政局というのがあります。通称 GS ですね。参謀第2部（G2）というのもありますが、これは（チャールズ・）ウィロビーという人（少将）が動かしていたのです。GS は（コートニー・）ホイットニー（准将）

とか（チャールズ・）ケーディス（大佐）といった、いわゆる民主派。日本の民主主義政策は、この民政局（GS）が主体になって進めたと言われています。ウィロビーは日本を反共の拠点にしようということで、両者は対立していましたが、石橋湛山はGSと徹底的に対立します。G2の側に立って、対立したのか。そうではないのですね。ここに「GSの持っている二重性」が出ていることを、我々は見抜かなければいけない。

話はそれますが、戦後民主主義は確かにGHQが主導権を取って教えてくれました。制度として定着するようにしました。しかし、この民主主義は「アメリカンデモクラシー」です。デモクラシーは、何もアメリカンばかりではない。いろいろなデモクラシーがある。しかし、これはアメリカンデモクラシーだということ。良い悪いではないのですね。アメリカンデモクラシーには多くの欠点があるということ。私たちはアメリカンデモクラシーの“アメリカン”を取る努力をしないといけない。あるいは戦後民主主義の“戦後”を取る努力をしないといけない。普遍的・原則的な民主主義に持っていかないといけない。私はその役を石橋に求めるのですが、それはともかくとして、石橋は、なぜGSの民主化の一派と対立したのでしょうか。

民主化の将校たちは立川に家を建てた。冷蔵庫を買う。洗濯機を買う。車を買う。それを全部、日本の予算で出せという。あるいは、ゴルフをやりたいから自分たちのゴルフ場をつくりたい。日本にカネを出せという。石橋は断固拒否します。我々は戦争に敗れたがゆえの連合国側の申し出に対する経済的な負担をしなければいけないのは、ポツダム宣言に書かれているようなことを含めて当たり前だ。しかし、あなたの私生活、プライベートなことまで、何で国の予算で見なければいけないのか。公然と反対します。公然と反対するということは、当時の仕組みの中で、そういうことを言える人はほとんどいなかったのです。皆「ご無理ごもつとも、その通りです」と、結局は目をつぶって通すわけです。しかし石橋は通さなかった。決して通さなかった。それを認めなかった。こういうプライベートなことは、あなた自分でお金を出してくださいと、認めなかった。

「この野郎、生意気だ」と、睨まれたんです。本来、公職追放というのは、GHQが戦争に協力した人の序列を作って、公職追放したのです。石橋は何らも公職追放に該当しません。該当しないけれども彼は追放されました。それはGHQのGSの民主派将校の得手勝手なそういう要求に対して断固拒否したからです。

私たちは、公職追放というと戦争に協力したから追放されたのだと一言に言う。それがほとんどであるのは事実だけれども、石橋のようにGHQの言うことを聞かないで追放された

人がいるということ、私たちは日本にこういう人がいるということの誇りとして、理解すべきだと私は思います。

石橋は自分が追放されるなどと、これっぽっちも思っていなかった。しかし、結果的に追放されますが、そのとき吉田首相は「きみ、犬に咬まれたと思って我慢しろよ」というような言い方をしたという。以来、石橋さんと吉田さんの間には関係が崩れていって、石橋さんはその後、反吉田の側に立ちます。しかし、路線として考えたら、石橋さんの考え方は吉田さんとかなり共通項があるのです。共通項はあるけれども、吉田さんが「まあ、我慢しろや」というようなことを言ったことに対する、石橋さんが許せないと思ったこと、それが「石橋・吉田の対立の原点」にあったということ、私たちは知る必要があるのですね。

もう1つ補足しておきます。石橋さんが政治活動をしようとした時、結果的に吉田内閣の大蔵大臣に登用された。第1次吉田内閣の閣僚名簿を見ると分かりますが、吉田さんは学者が好きだった。あるいは戦前汚れたというか軍事と線を引いていた人たちが好んで、そういう人たちを登用しています。東畑精一（農業経済学者）を農林大臣に据えようとしたりしたが（固辞される）。それで石橋さんなども大蔵大臣に据えたのだと思いますが、それはそれとして置いて、先ほど中谷先生がお作りになった政党図の中で、石橋さんは、なぜ民主自由党へ行ったのでしょうか？ 自由党へ行きました。政府・軍事政権にずっと反対して、日本は小日本主義でいいと言っていた。もちろん社会党の側からもずいぶん誘われています。しかし、「私は自由党へ行きます」と言って自由党へ行きました。なぜ自由党へ行ったのか。私はそこに石橋さんのまた、骨と言いますかね、真骨頂があるのだと思います。

これは、いわゆる日本の左翼とか社会党とか共産党を批判するという意味で言うのではないのですが、社会主義政党は、「批判を許さない」。自由に討論ができない。基本的には、ある枠の中での議論になる。石橋さんはそれが嫌だと言っているのですね。自由に議論しなければいけない。社会主義、共産主義、その枠の中で議論するのではなく、そういうものを取っ払った上で議論をする。自由に議論する。その自由に議論するというのを保障するのが日本自由党なのだと言って、自由党へ入っているわけですね。

戦後草創期に政党が幾つか出来て出発していきます。戦争中は大政翼賛会の下で、軍の大きな流れの中に組み込まれていましたけれども、しかし、戦後それぞれが独自性を持って政党活動をしていきます。私はそここのところにすごく興味があるのです。

私は東條英機という人を、どのような人だったのか、どのような指導者だったか、7年かけて調べました。好きか嫌いかという嫌いです。しかし、この人が議会でどういうふう

政党をあしらったかは、昭和 17 年 4 月の翼賛選挙を見れば分かるわけですね。翼賛選挙の後、昭和 20 年までの戦争の間、議会は、言ってみれば翼賛議会です。大政翼賛会の、軍の、言葉は悪いけれども、呼応するだけの議会政治です。その中で反東條を掲げて、露骨に掲げるわけにいかないけれど抵抗した人たちがいるのです。「護国同志会」と言います。護国同志会には、社会党右派へ行った三宅正一、社会党の三輪寿壯、岸信介、赤城宗徳、中谷武世、井野碩哉とか、親軍派と一線を引いた人たちがいます。そういう人たちは護国同志会で東條に細々と抵抗した。私は、護国同志会が命を懸けながら抵抗したという意味で言うと、それはそれで凄いなと思って、何人かに話を聞きました。昭和 50 年代の初めです。

三宅正一さんに話を聞きに行きました。衆議院の副議長でした。「きみは何歳か」と聞かれましたね。私は、たしか 30 代の終わりか 40 代でした。「きみはな、人生の時間というものをごどう考えているのだ。東條のような、くだらない男を調べて、人生の時間を無駄に使うな。そんなことをやっている暇に、もっと重要なことが日本にはあるのだ」と言われて、僕はものすごく腹が立って「東條を調べるのは重要でないということから見過ごしていたら、問題がずっと残るだけではないですか」というと、あれは最低の男でどうのこうのと、さんざん悪く言いました。なるほど、彼らは軍に対して、こういう恨みを持つのかと思いました。

中谷武世（なかたにたけよ）という代議士は、東大の「新人会」（戦前に存在した東京帝国大学を中心とする学生運動団体）に反対する上杉慎吉（憲法学者・君権学派）らのグループで、岸信介さんなどと親しいグループです。和歌山の出身ですね。私は話を聞きに行きました。「あなたは護国同志会としてずいぶん質問をしている。軍人に脅かされませんでしたか」というと、「当たり前だよ。脅かされたよ。命が狙われるかと思うぐらい」「怖くなかったですか」「いや、怖いよ。だけど、きみね、あの戦争は仕方がないところはあるけれども、議会は軍がここまで馬鹿にしたら、我々議会人は、右左関係ない。我々の存在に対して異議申し立てをするのは代議士として当たり前なことだ」と、三宅さんとはちょっと違った立場で、激昂しながら話しました。

私は、戦時下の議会というのが、いろいろな問題を含んでいるのは事実だと思います。しかし、そうして抵抗した人たちもいるのです。具体的には国会の議事録を吟味して詳しくお調べいただければと思いますが、東條は軍人ですから法的な根拠について詳しくは分からない。戦争中の時限立法が幾つか国会に提出されます。戦時〇〇法というのですね。戦時の時限立法です。鶴見祐輔という議員が、

「首相、この時限立法は、いつ終わるのですか。時限立法の終わる時を説明してください」

東条は何と言いましたか？

「戦争が終わった時です」と言ったのですね。

「いやいや、そうではありません。法的な説明をしてください」

「戦争が終わる時、平和が戻った時です」

議長も、予算委員会ですが、驚いたのでしょうか、

「法制局長官、教えてください」と言った。そして戦争が終わった時の何とか何とかということの説明をしました。どういうことか。東条という人に代表される軍人の中には、時限立法や戦時ということの説明できないで法律というものが議論されていたということではありませんか。もちろん議事録を見ると、込み入ったやり方を若干していますが、基本的には、私の言わんとするようなことの枠組みにあります。

そのような議会に対して、メディア、新聞は批判をしていません。できない。ところが、石橋さんは遠回しに批判をしていますね。議会が議会である理由は何か、「議会が議会としての役割を果たすべきは何か」ということ。そういうことをきちんと真正面に言うと弾圧されるけれども、しかし言わなければいけないことは言う。そういった精神を持っているか、持っていないか、というのは大事だと思います。石橋湛山という人は持っていたのです。だからこそ石橋湛山という人は自由にディスカッションをし、自由に論じる。それを保障する政治集団でなければいけないと言って自由党へ行った、ということですね。

こういう石橋の中に、自分の考えている国家的なビジョンとは何かということ、だんだん彼自身が言論の中で形作っていきました。彼は4年ほど公職追放になります。それはなんにも戦争に協力したからではないのです。先ほど言ったように GHQ の民政局、我々は戦後民主主義を GS のホイットニーとかケーディスとかそういう人たちを礼賛するけれども、決して礼賛に値しないというような支配者のそういうものに対して石橋が問題を提起している、ということを含めて見ていく必要がある。そういうところから何が分かるか。石橋の言論活動を通して何が分かるか、ということです。ここから状況は、もっと大きな形で見るとあるということになると思います。

1 つは、日本近・現代史と言いますが、「近代史」とは明治維新 1868 年から 1945 年までの「77 年間」です。これが近代史です。戦争によって解体しましたが、これが近代史です。現代史とは、解体して連合国の支配を受け、それから現在までを言います。今、「77 年目」です。「近代史の 77 年、現代史の 77 年」。私たちはここで、ちょうど同じ時期、戦争というものを選択した近代史と、経済というものを選択し、その後、国家として形を作

っていく。77年と77年、この2つの期間の中で国家を2つ作ったと言っていいと思います。問題は近代史と現代史がここで、この77年の後、これから多分、変わっていくと思いますね。コロナ（新型コロナウイルス感染症の流行）によって変わっていくと思います。コロナによって私たちの国は変わっていくのだということを考える必要を感じます。例えば人が内向きになっていくとか、例えば仕事の質、仕事の進め方、ビジネスの枠組みが変わる。そういうような変わるということがこれから幾つも想定されます。その想定される時に、私たちは近代史の中で、現代史の中で、この人が言っているというものを土台にしながら、歴史が変わるといふときのことを自覚する必要があるのではないか。その1人が石橋湛山である。

石橋湛山という人は、「近代史の言論人」、「現代史の政治家」として、彼がこの国をどういうふうにしていこうとしたのかということを含め、私は、それが次の時代への方向性を示す人だと思います。

先ほど言いましたように、私はこういう仕事をやって、評伝を何人か書いてきました。例えば昭和という時代を取り上げると、昭和の前期は、昭和20年までの戦争の時代です。15人の首相がいます。代表するのは誰だろう。好き嫌いを別にして、やはり「東條英機」です。それから占領期が27年4月28日まで6年8カ月あります。その間に5人の首相がいます。代表するのは誰だろう。「吉田茂」ですね。その後、日本が独立を回復し、昭和天皇のお亡くなりになる昭和64年1月7日までの間を「昭和後期」という。それを代表する首相は誰だろう。ここには12人の首相がいます。代表するのは誰だろう。いろいろな考え方があるといいますね。田中角榮さんだ、池田隼人さんだ、佐藤榮作さんだ、中曽根康弘さんだ、いろいろな考え方があるといいます。私は、最も分かりやすく、「田中角榮さん」ではないかと思えますけれども、そして東條英機、吉田茂、田中角榮、昭和を代表する3人の首相を見た時に、それぞれの持っているものが違うことが分かります。

東條は陸軍大学校を出た軍人です。陸軍大学校出身の日本の皇軍将校として、その価値観と行動の所作の細かいところまで、軍のマナーに即しています。東條を見ることによって日本の軍のプラスもマイナスも全て分かります。

吉田茂という人は、もちろん彼の多くの著作の中で言っていますが、基本的には、近代日本の中で、「日本は英米と一体化して歴史を作ってきたのだ。その英米と離反するような形の歴史という満州事変後の歴史は日本の変調を来していたのだ。こういう歴史の変調を正常に戻さなければいけない」といふようなことを言っています。

田中角榮さんは、女性の参政権を得ました、いわゆる「戦後民主主義が持っている権利」というもの、それをほとんど使いながらと言うと語弊がありますが、その中で首相としての力を発揮した。ある意味で田中角榮さんという人は、近代・現代日本史の中の一番モデルとなる人だなという感じがします。

私たちは、自戒を含めて言うのですが、田中角榮という人がある意味で言えば利用したのかなと。私たちは欲望が2倍3倍に肥大化する中で、そういう社会が日本を幸せにするのだと。物量の2倍3倍、それが幸せにするのだと。そういう考え方が戦後復興と重ね合わさってしまった。田中さんはそれをきちんと実行した。それを実行した田中さんは、庶民のそういうエネルギーというものをきちんと見ていた。言い方は悪いですが、それは私たちが持っているエゴイズム、そういうものを田中さんに仮託して、言葉は悪いけれども、田中さんを利用したのではないかと思う。田中さんをきちんとした歴史の中に位置づけてみることは、もっと行うべきだと思います。ロッキード（事件）は陰謀だと思っていますから。それを言っただけですが、きちんと見る必要はあるように思いますね。

そのようなことを含めて私たちは、誰が、この時代を動かした時に、何を学ぶか、石橋湛山を学ぶということは、逆に言えば、吉田茂からは、どの時代の何を学ぶか、田中角榮さんからは何を学ぶか、東條からは何を学ばないのか、というような、それぞれ「柱が立つ」ということが分かると思います。この柱が立つことの原点にあるのは何かというと、「幕末維新・明治」ですね。私たちの国は幕末維新で世界の流れに入って行きました。270年近く鎖国をしていましたが、ただの1回も対外戦争をしなかったのは、逆に言えば、私たちの国に何か国民的な性格を遺伝子として残しているはずなのです。ところが、近代史に入って軍隊を持った。その軍隊はプロシア・ドイツの真似をした。私たち自身の中に持っている江戸時代から続く「武」という考え方を基にした軍事学というものを持てばよかった。そうするとその軍事学というものは日本の独自の軍事学たり得たと思うけれども、「西洋の生煮えの軍事学」を持ち込んだ。そのところは、もう一度、整理する必要があると思います。

ドイツの軍事学を持ち込む時に、ドイツの軍事学の持っているプラスとマイナスがあるのですが、それを何の精査もしないで持ち込んだ。先ほどの統帥権の問題などはドイツの、第1次世界大戦を見れば、短期決戦でやればドイツは、統帥権・独立権を軍が持っていましたから確かに強かったのです。しかし長期戦になるとガタガタと崩れていきます。統帥権独立で政治が機能しなくなっていったからです。

そういったことを含めて総括しながら見ていくと、明治維新から近代史の中で、私たちの

国が立った時に、この国の国家像というのは3つか4つあったと思いますね。

1つは、西欧の列強に帝国主義的な支配をされない。そのためには帝国主義的な国というものを求めていく。それが1つ。

2つ目は、帝国主義的な国家を求めるにせよ、西欧は市民社会を併せ持つようになってきているのを含めて帝国主義が変化していく、その変化の過程のいいところを取って変えていく。

あるいは「自由民権思想」に基づいた国家を作る。

あるいは「鎖国」をそのまま継続する。日本は鎖国といっても結構国を開いていたわけですが、開いているところを部分的に広げていくという形の国づくりをやる。

もう1つは、日本が明治維新に入った時、アメリカは南北戦争を終わって国家統一されました。アメリカと同じように、「連邦制国家」を作るという可能性を模索する方法もあった。幕府は中央政府であり、各藩は地方の政府として幾つか一緒にならなければいけません、連邦制国家を作る可能性もあった。

しかし、結果的に私たちは、他国から植民地にされたくないということで、帝国主義的な国家として対立するという形で、そういう選択をします。私は、その選択自体は間違いではなかったと思いますが、選択の仕方、選択の後の運用のところで、石橋湛山のような考え方が入るべきではなかったかなと思いますね。帝国主義的な国家に対する、私たちは自立しながら戦うけれども、私たち自身はそれを目指さないというようなところ、それはどういう国家になるのだろうというようなことが、明治の近代史の出発点に試されるべきだったと思います。

そういう中で、石橋さんの理論というのは、今、私たちは近代史の中の言論として見るけれど、もっと言うと、近代史の出発点の時の国づくりとして、石橋さんのような理論に基づいた国とは、どういう国なのか、ということが整理されて、それを継ぐ国家像を作る。それが私は、これからの1つの課題になるのではないかなという感じがします。

ちょっと石橋さんの話が散発的になって、統一されてなくなりましたが、最後に、石橋さんの中で、持っている考え方というのは、結局、体調が悪くて辞めることによって65日でこの内閣は終わりました。この内閣が終わったということによって具体的には、政策として決定して、政策が変わったということはありません。この政策が石橋さんの残したあれだよということはない。しかし何年か経って、それが実っていったというものは、やはりあると思いますね。石橋さんが協力した日中国交回復とかもそうですが、しかし、石橋さんの持つ

ている国家像の中に重要な問題が1つあるということ、私たちは忘れてはいけなと思うのです。それは、くどいけれど、「戦争という選択」をした私たちの国が、その選択自体の中に多くの錯誤もあった、しかし選択せざるを得ないという歴史的背景もあった、そういうことを私たちは批判あるいは抽象化して論じるのでなく、その中から何を学んだのかということが、次の段階に生かせるかどうかというのは、次の世代が問われていることです。

つまり、石橋さん、あるいは吉田さんにしてもそうです。幣原外交にしても、あるいは原敬の議会に対する考え方でも、浜口雄幸の経済政策でもいいですが、いろいろなそういったものを私たちは組み立てて、私たちの時代にどういう形で作り得るのかということを考えていかなければいけない。それを考えるのは、なにも厄介なことではなくて、私たちの国の土壌の中で、先達の蒔いた種がそのままになっているのは随分あると思います。その蒔いた種を拾って育てていくというのが大事かなと思います。

どうもすみません。話が長くなりました。

(この回おわり)